
キスから始まる

日下部良介

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

キスから始まる

【Nコード】

N1682BA

【作者名】

日下部良介

【あらすじ】

大晦日に出会った一人の女の子。それは運命の出会いだったのか
…。

(前書き)

2012年を迎えるにあたり書き下ろした『2012文字小説』です。

大晦日。間もなく新年を迎えようとしている。

今年に限って、何だと言うのだ。未だに会社の自分のデスクで仕事をしているなんて。

『何時になったら帰れるの?』何回、同じメールが届いただろうか…。

仕事納めは12月28日だった。顧客への挨拶回りも終わって会社に戻ると、他の社員は既に大掃除を行っていた。僕はコートをロッカーにしまつとデスクに戻ってメールをチェックした。

『来春のプロジェクトの企画を御社に発注することになりました…』
「おっ!」僕は思わず声をあげた。それは、来期の売上げを左右する大型の物件だったからだ。

『…つきましては、年明け早々に企画会議を開きたいと思っておりますで、1月5日までに大まかな企画書をご提出願います』

「な、なに?5日だって!」いつたい、今日は何日だと思っているんだ?間に合うわけがない。

僕がそう思っていると、背後から社長が肩に手を置いた。後ろから僕のパソコンの画面を覗いていたらしい。

「やったじゃないか」

「えっ?でも時間が…」

「5日までだろう?今日を含めて、あと8日もあるじゃないか」社長はそう言つと、ニコニコしながら、席に戻って行った。

冗談じゃない!僕にだって正月の予定はあるんだ。こうなつたら意地でも年内に終わらせてやる。

そして、今日の大晦日。ようやく企画書が完成した。

“23:28”画面の右隅に表示された数字が今の時刻を示している。僕は携帯電話を手に取った。

「もしもし…」僕が口にすると同時に彼女の声が聞こえて来た。

『終わった？早く来て！下で待ってるよ』

「えっ？下つて…」僕は思わず窓を開けて下を眺めた。携帯電話を耳に当てて、彼女が明かりのついているこの部屋を見上げていた。『待ちきれなくて、トシくんの会社まで来ちゃった』

僕は急いで地下駐車場に下りると、車を出してエントランスへ滑り込んだ。彼女の前に車を止めてドアロックを解除した。

彼女は車に乗り込むと、口を尖らせて言った。

「もう少しで凍えちゃうところだったわよ」

「ゴメン…」

「でも間に合ったネ」そう言った彼女の顔にはいつものように笑顔が戻っていた。時刻は23時54分。

カーラジオからカウントダウンのコールが聞こえて来た。3・2・

1…。その瞬間、僕達は唇を合わせた。

「HAPPY NEW YEAR！」

僕が彼女と初めて会ったのは3年前の大晦日。

初詣に出かける途中、酔いつぶれて路上でうずくまっている女の子に声をかけた。彼女はいきなり僕に抱きついてキスをしてきた。その瞬間、新年を告げる神社の太鼓の音が聞こえた。

「HAPPY NEW YEAR！」そして彼女が叫んだ。

結局、初詣には行けなかった。彼女は叫んだ後、僕に抱きついたまま意識をなくした。僕は仕方なく彼女を自分の部屋に連れて来た。僕のベッドでイビキをかきながら爆睡している彼女をしばらく眺め

てから、僕はコタツに潜り込んだ。

台所で僕が雑煮を作っていると、彼女の悲鳴が聞こえた。

「キヤー！」

僕は昨夜のことを彼女に話した。彼女はどうやら、大晦日の当日に彼氏に振られてやけ酒を飲んでいたらしい。僕をその彼氏と勘違いしたということだった。

彼女は僕が作った雑煮を食べている。

「これ、おいしいわ。あなたが作ったの？」

「そう」

「ふーん」

「ところで君の名前は？」

「あつ…。美和子。みいこって呼んで。あなたは？」

「みいこ？ネコみたいだな。僕は俊樹」

「トシくんね！よろしく」

「なにが？」

「ん？気にしない、気にしない」

それ以来、彼女は僕の部屋に住みついでしまった。何が気に入ったのかは知らないけれど。まあ、僕も無理に追い出したりするほど邪魔な存在には感じなかったので成行きに任せようと思った。

ただ、あのときは気が付かなかったけれど、彼女はとても女の子らしく可愛らしい女性だった。彼女が僕に恋愛感情といったものを持ち合わせているとは思えなかったが、僕は次第に彼女のことを好きになっていった。

一年後、その年の大晦日。二人で初詣に出かけた。神社の境内に並んでいる時に新年を告げる太鼓が鳴った。その瞬間、彼女が僕にキスをした。二度目のキス。

「これは本気のキスだよ」

「えっ？」
「そばにおいてくれて、ありがとう。ずっと好きだったんだよ」
「えっ？」
「あのお雑煮を食べてから、ずっとネ！」
「えっ？」
「なによ！“えっ？”ばかりだね」
「ああ…」
「これからも、ずっとキスできるといいね」
「えっ？」
「またあ…。これからも、新年を迎える瞬間にはトシくんとキスしていたい」
「うん！みいこ…」
「なあに？」
「愛してるよ」
「私も！」
それから、新年のキスは欠かせない行事の一つになった。

今年は諦めていた。終わらなくても早めに切り上げるつもりだった。年が明けて少しやれば間に合うところまで出来ていたのだから。だけど、彼女が『やり残しはダメ』というから。まさか彼女が会社まで来るなんて思ってもみなかった。

僕はダッシュボードから小さな箱を出して彼女に渡した。
「結婚しよう！」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1682ba/>

キスから始まる

2012年1月4日09時47分発行